

## 小・中・高の系統性のある英語教育をめざして

朝来市立生野中学校  
教諭 藤本 美千代

### 1 はじめに

本校は、平成26年度から4年間、市内の5校（朝来市立生野小学校、山口小学校、中川小学校、朝来中学校、兵庫県立生野高等学校）と共に、文部科学省より外国語（英語）教育強化地域拠点事業としての研究開発校の指定を受けた。この事業に関わり、本市では、「国際社会の一員として様々な分野で活躍できるグローバル人材の育成」を研究テーマとし、各校種の目指す児童像・生徒像を設定した上で、小・中・高の系統性のあるカリキュラムの作成、指導力の向上、評価方法の確立等に取り組んだ。

私は研究主任として、中学校が小学校との学びの連結、高等学校への連携をする本事業の要であるという認識と使命感をもち、本事業に係る取組を推進してきた。

### 2 取組の内容・方法

#### (1) 目指す児童・生徒像の設定

校 種	目指す児童・生徒像
高等学校	英語を用いてディベートをしている生徒
中 学 校	英語を用いてプレゼンテーションをしている生徒
小学校（高学年）	英語を用いてコミュニケーションを楽しんでいる児童
小学校（低学年）	英語を用いて楽しくコミュニケーションをとっている児童

#### (2) 小・中・高一貫した CAN-DO リストの作成

各校の担当者と共に、4技能（5領域）に関する小・中・高の一貫した CAN-DO リストを作成した。（一部抜粋）

画 素 事 項	英語を用いてディベートをしている生徒			英語を用いてコミュニケーションを楽しんでいる児童		
CEFR-J						
	やりとり	発表(Speech)	発表(Presentation)			
B2.1	3 高 年 級 時事的な話題についてディベートすることができる。	色々なテーマについて相手の意見を聞いた後で、質問したり、それに対しての自分の意見を述べることができる。	自発的にテーマを選び、それについて自分の意見を即興的に発表できる。	A1.2	6 小 年 級 将来の夢やオリンピック・パラリンピックでみたい競技などについて、慣れ親しんだ表現を使って、自分の意思を伝えたり、相手に意見を求めたりする3～4位程度の簡単なやりとりをすることができる。	自身の思いや中学校生活などについて、日常生活に関わる簡単な内容の話題について、3～4文程度の発表をすることができる。
B1.2	2 高 年 級 身近な話題について簡単な内容のディベートができる。	色々なテーマについて調べた内容について相手に自分の意見を正確に述べることができる。	日常生活の身近な状況を正確に詳しく説明することができる。			
B1.1	1 高 年 級 様々な話題について、簡単な意見交換ができる。	短い読み物や記事を読んで、メモを見ながら概要を説明することができる。	様々なテーマについて、詳しい図表や資料を作成し、相手に理解できるように発表できる。	A1.1	5 小 年 級 丁寧な要求の仕方や自分のあこがれの人についてなど、慣れ親しんだ表現を使って2～3位程度の簡単なやりとりをすることができる。	自分や他者ができることや行ってみたい場所や地域などについて、日常生活に関わる簡単な内容の話題について、2～3文程度の発表をすることができる。
	英語を用いてプレゼンテーションをしている生徒			英語を用いて楽しくコミュニケーションをとっている児童		
A2.2	3 中 年 級 行ったことのある場所について、そこがどのような場所か何をしたことがあるか会話することができる。	行きたい場所やそこでしたいことについて、メモを見ながら発表することができる。	日本文化について発表資料を英語で作成しその資料を見せながら発表することができる。	A1.1	4 小 年 級 持ち物や欲しいものなどについて、1～2位程度の簡単なやりとりをすることができる。	お気に入りの場所や自分の一日などの自分に關する情報について、1～2文程度の発表をすることができる。
A2.1	2 中 年 級 自分のお気に入りの店や場所について、会話することができる。	メモをみながら自分の将来の夢や希望について、原稿を基にスピーチすることができる。	自分が最も興味のあることやものについて、資料を英語で作成し発表することができる。			
A1.3	1 中 年 級 自分の得意なことについて短い会話をすることができる。	自分の大切にしているものについて、準備をしたうえで発表することができる。	挨拶や簡単な自己紹介や他者紹介を伝えることができる。	PreA.1	3 小 年 級 好きなものや数などについて、1位程度のやりとりをすることができる。	自分の感情や状態、好きなものなどについて、1文程度の発表をすることができる。

(3) 各単元に落とし込んだ評価規準の作成

小・中・高で教科書の内容に沿い、新学習指導要領に合わせ、4技能（5領域）についての評価規準を作成した。以下は中学校2年生 Lesson1 の評価規準である。

第2学年					
Lesson 1	Listening	Reading	Speaking(1方向)	Speaking(やりとり)	Writing
知識・技能	一般動詞の過去形を理解した上で、「春休みの出来事」についての発表の内容を聞き取ることができる。旅行に関する語句を聞き、理解することができる。	一般動詞の過去形を理解した上で、「春休みの出来事」についての会話の内容を読み取ることができる。旅行に関する語句を語句を読み、理解することができる。	一般動詞の過去形を理解した上で、「春休みの出来事」を伝えることができる。旅行に関する語句を正しく言うことができる。	一般動詞の過去形を理解した上で、相手の話を聞き、質問したり、質問に答えることができる。	一般動詞の過去形を使って、春休みについての作文を書くことができる。旅行に関する語句を正確に書くことができる。
思考力・判断力・表現力など	一般動詞の過去形を含む相手の話を聞き、その内容を的確に理解することができる。	一般動詞の過去形を含むハワイ滞在の物語文を読み、その概要を要約することができる。	一般動詞の過去形を含む文を使って、春休みを振り返り、事実や思いを形成・再構築し伝えることができる。	一般動詞の過去形を含む文を使った春休みについての話を聞き、それについての自分の感想を伝えることができる。	一般動詞の過去形を使って、春休みについての作文を時系列に書くことができる。
主体的に学習に取り組む態度	一般動詞の過去形を含む「春休みの出来事」についての発表に関心を持って聞き、その意図や気持ちを理解することができる。	ハワイ滞在の物語文を自ら進んで読み、ハワイの伝統文化について考えることができる。	春休みについてを聞き手に伝わるように自ら進んで発表することができる。	春休みについての話を聞き、思い出を共有しながら感想を伝えることができる。	春休みについての作文を、読み手に伝わるように配慮しながら自ら進んで書くことができる。

(4) 講師招聘研修の実施

本事業では、関西大学外国語学部長の竹内理教授、兵庫教育大学吉田達弘教授の指導を受けた。一年間に各校1～2回程度の講師招聘研修を行い、校内ならびに市の内外にも案内を出し、広く教職員の参加を求め、研修を深めることができた。

小学校の校内研修はレベルが高く、協議の柱を立てそれに基づいての議論を参観したことは、貴重な経験となった。また、以前は小学校、高等学校の授業を見ることは少なかったが、この事業を通して互いの風通しもよくなり、小・中・高の系統性をより意識した授業づくりに役立った。さらに、小学校での指導方法、内容を知ることが学びの連結に不可欠であることも再認識できた。同じことは高等学校においても言える。

(5) 定期的な担当者会の実施

市教委のバックアップにより、月1～2回、担当者会をもつことができた。ここでの情報交換やCAN-DOリストの作成等は、本事業を進めるに当たって不可欠であった。また、小学校からの質問や高等学校からの大学入試の情報提供により、広い視野に立って本事業を推進することとなった。

バックアップは市教委だけでなく、所属校からもあったことがとても大きい。担当者会のため学校を留守にする間、他の教職員の負担は増えるにもかかわらず、快く送り出してくれた。市教委、所属校の高い同僚性が本事業の肝であった。

(6) 中央研修への参加により指導力の向上

平成27年度文部科学省英語教育推進リーダーとして、中央研修に参加し、4技能の言語活動を通じた指導力の向上を主として学んだ。特に生徒の総合的なコミュニケ

ーション能力の育成、英語を用いた言語活動が中心の指導方法等は非常に勉強になった。2週間の中央研修を経て、翌年より但馬地域の英語科教員に対し、伝達講習を4回行った。自分で学んだことを地域の教職員に伝えることにより、さらに自分の中で学んだことが身についた。また、この中央研修では、自分がそれまでに行ってきた指導の方向性が間違っていなかったことを再確認できたことに加えて、生徒の力をさらに伸ばせる指導方法を学べたことが大きかった。

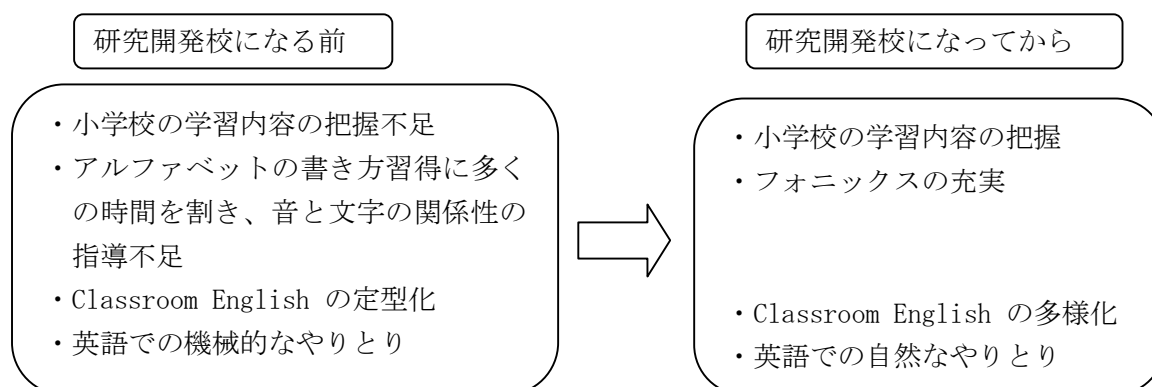
### 3 取組の成果

研究開発校となってからの本校を取り巻く英語教育は大きく変化した。文部科学省が発表している「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」の中にも「授業を英語で行うことを基本とする」とあるが、それは教員が一方向的に英語を話すのではなく、生徒から教員へ、生徒から生徒へという方向も視野に入れている。

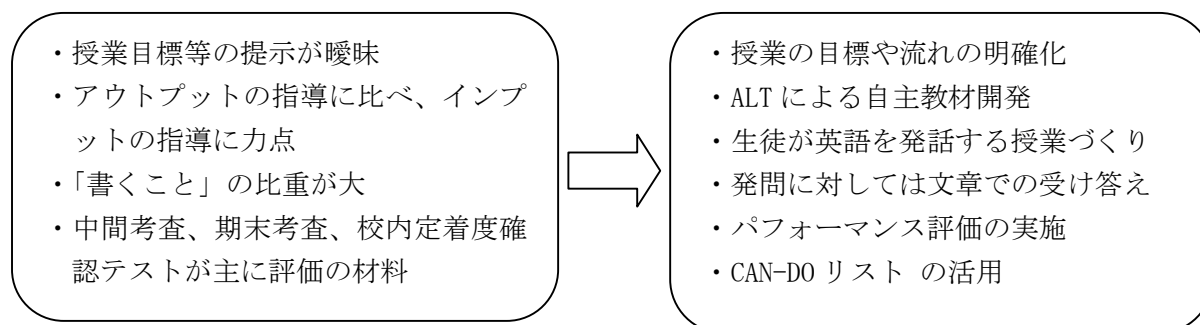
本事業では、各校の目標として、「生徒が英語で発話する時間を増やす」ということについて、こだわって行ってきた。以下に教師、組織、生徒の変容を示す。

#### (1) 教師の変容

ア 学びの連結部である中学1年生の年度当初の指導について



イ 全学年の指導について



ウ 4年間を通して見えてきた成果と課題

<成果> ・授業の見通しを明確にした指導ができた。

・コミュニケーション能力を重視した指導ができた。

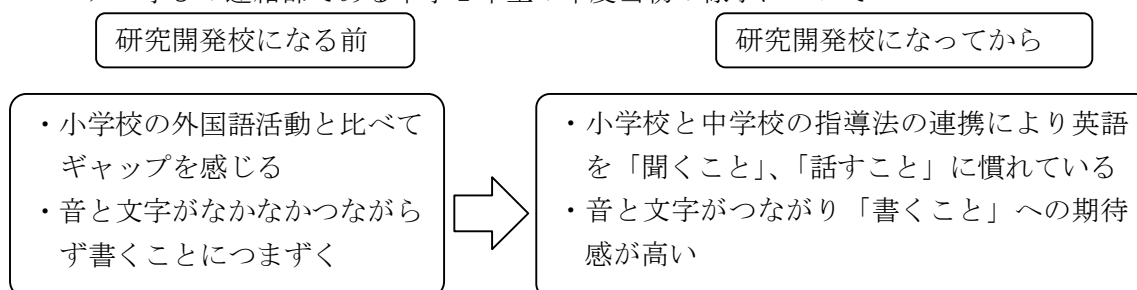
<課題> ・新学習指導要領の趣旨及び児童生徒の実態を踏まえた校種間連携の充実

## (2) 組織の変容

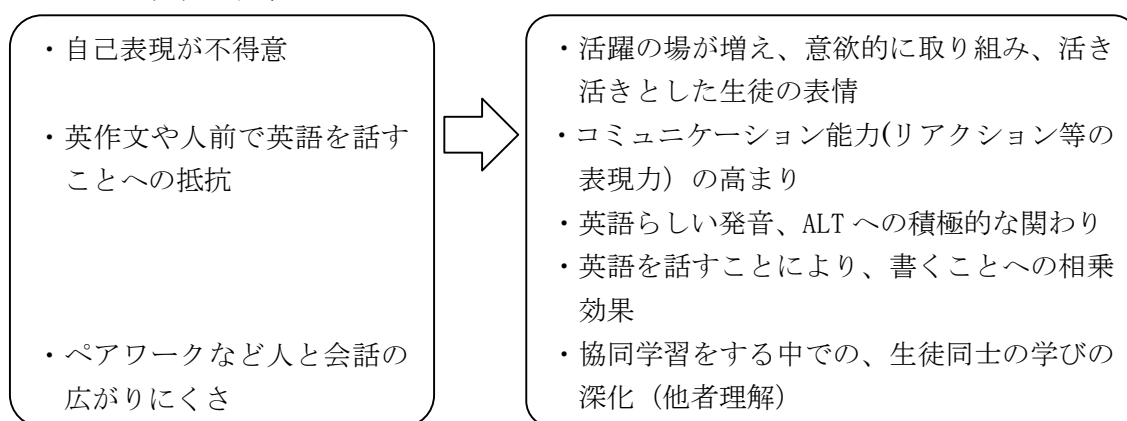
- 学校全職員でベクトルを同方向に向け研究を深めることにより、教科の専門性や所属する学年の枠を超えて意見を出し合い、互いに高め合う組織集団が形成された。
- グローバル人材育成に向けた研修テーマを掲げることにより、具体的な課題を設定した校内研修を通してより実践的なものへと深化させることができた。
- 全教科、全領域で言語活動を取り入れたカリキュラムを編成することにより、生徒の主体性や学びに向かう力を引き出すことに成功した。
- 専門教科の枠を超え、互いの授業参観をする機会が増えた。
- カリキュラムマネジメントにより教科間の指導内容に連続性をもたせることで、より深い指導を行うことができた。

## (3) 生徒の変容

### ア 学びの連結部である中学1年生の年度当初の様子について



### イ 全学年の指導について



## 4 課題及び今後の取組の方向

この4年間の指定研究では、予算が確保された中で安心して研究開発を進めることができた。指定研究がなくなる今後は現状の予算確保が難しく、生徒の英語力を客観的に測るための外部試験等の活用も困難となってしまう。

しかし、この4年間の取組が新学習指導要領を踏まえた今後の小・中学校における外国語教育の礎となるよう、成果と課題を踏まえて継続して取り組んでいくだけでなく、先進校としての取組を県の内外へ情報発信していくことも大切である。